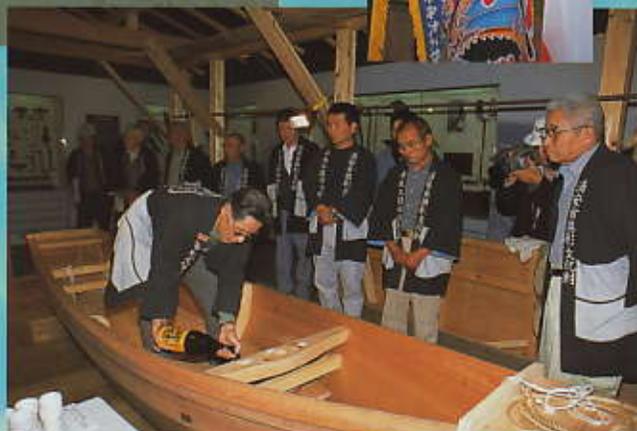
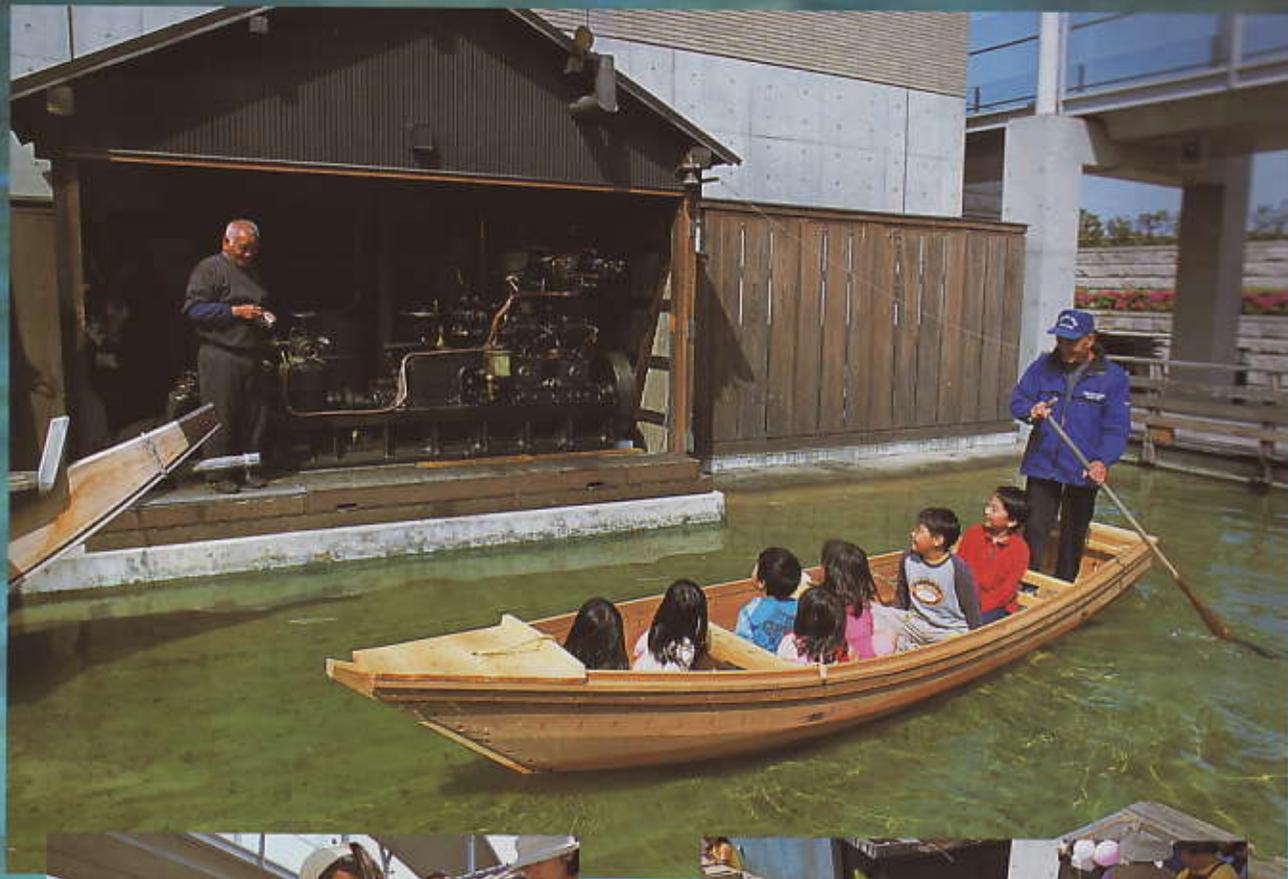


個性輝く
まちづくり

漁師町の伝統を子どもたちに
伝えようと集まった大人たち

千葉・浦安市 もやいの会





舟大工の宇田川彰さんの指導のもとサラリーマンの中山幸雄さん、宇田川國夫さんが作ったべか舟がいよいよ進水式を迎え、郷土博物館屋外展示場「浦安のまち」の中を流れる「境川」に浮かべられた。

べか舟とは、その昔、貝や海苔の漁に使われた小さな木造船のこと。山本周五郎の小説「青べか物語」で知られるかつての浦安の名物。そしてこの郷土博物館で来場者にべか舟乗りや投網、昔遊びなどを教えているのがもやいの会のメンバーたち。元漁師や舟大工、サラリーマンと職種も年齢も多彩。土日もなると親子連れや小学生たちが訪れ、館内に再現された昔の浦安のまちが活気づく。

もやいの会の「もやい」とは舟を係留するときに使うロープのこと。新旧住民、大人と子どもをつなぐ役割を担おうと名付けられた。

遊びの達人が銭湯の前でベゴマを回しながら子どもたちに「勝負するか?」とけしかけている。端材を利用したコースターづくりでは、子どもたちが鋸を使っている脇で「お、上手いな、昔大工だったのか」とちゃちゃを入れながら上手な鋸の使い方を教えている。昔ながらの駄菓子屋では子どもたちが品定めをしてお菓子を買っていく。舟大工技術保存会会長で、炎の舟大工「宇田川信治さん」は言う。「舟大工ってのは元々無口なんです。だけどここでは石の地蔵じゃだめ。みんなに分かってもらわなきゃ」。べか舟乗り場の対岸でひととき異彩を放つ焼き玉エンジン。始動させる「海の爆走王」。こと長島勇さ



んは元機関士。このエンジン、実は四十年前に製造された代物。長く江戸川に沈んでいた舟から引き上げられ、プレートから伊豆の土肥で製造されたことが分かった。五センチ以上も付いていた錆を落とし、製造元で修復されたという伝説の焼き玉エンジンだ。エンジンをかけてみないと前に進むか後ろに進むか分からないらしい。その切り替えが腕の見せどころ。爆音とともにエンジンが見事始動すると、集まった子どもたちは拍手がわき起こった。

博物館前の芝生では細川流投網保存会の面々による投網の実演が始まった。あたかも大輪の花が咲くように網が広がる。

埋め立てにより面積は四倍、人口は実に七倍にもふくれあがった浦安市。しかし、かつての漁師町の面影は年々消えつつあった。郷土博物館構想が持ち上がったのは、そんな浦安の良き文化を次代を担う子どもたちに残そう、伝えようという多くの市民の思いからだ。昨年オープンした郷土博物館には、この一年間で人口を上回る十五万人が来場した。そのうち六割が子どもたちだ。

指導主事の本山哲也さんは言う。「ほとんどの住民は浦安の文化を知らない新住民。だけど文化を守ってきた人たちの努力を伝え、学んで欲しい。新旧住民がお互いにまちづくりを考えないといけない。だから博物館のモットーは『まちづくり』なんです」。確かにほとんどの住民が転入してきたが、その子どもたちはここ浦安で生まれ育ち、浦安が

「ふるさと」だ。本山さんは元々小学校教諭。教育現場を離れて博物館に行くことには少なからず抵抗があったという。しかし、赴任するときに言われた言葉「何をやってもいい。子どもたちが楽しんで生き生きできることをやろう」に共感して、体験できる郷土博物館がスタートした。

学校教育との連携は博物館の大きな柱。地蔵を教材にして子どもたちに文化を学んでもらう。そこで登場するのが「もやいの会」のメンバー二百九十人というわけだ。船大工技術保存会や細川流投網保存会などいくつかのグループからなる。昨年度は百七十三回も小学校の課外授業というかたちで、「先生」となった。卒業記念にと、宇田川信治さんたちが指導してべか舟一艘を作った中学生の卒業式にも呼ばれたそうだ。「ヘタでもみんなで一生涯懸命やればこんなすこいことができる、ということが伝えられたと思う」とその時の喜びを語る炎の舟大工は破顔一笑。

ミニチュアべか舟づくりに参加した人が地元自治会で同じように教室を開くなど、地域への広がりも出てきている。

新旧住民、大人と子どもをつなぐもやいの会の取り組みは、二百九十本のロープとなってまだ見ぬ未来の浦安につながっているのかもしれない。

■連絡先 浦安市郷土博物館

TEL 〇四七—三〇五—四三〇〇

